

読賣新聞

2012年(平成24年)

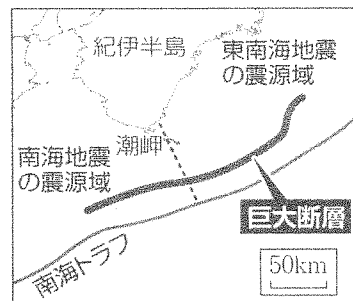
1月28日 土曜日

紀伊半島沖の海底で、東南海地震と南海地震の震源域にまたがる東西200キロ以上の断層を、東京大学と海洋研究開発機構の研究チームが発見した。二つの震源域にかかる巨大断層の発見は初めて。宝永地震(1707年)などの連動型地震で、この断層が大きく動き、津波の発生源となった可能性がある。

東西200キロ

駿河湾から四国・九州沖に延びる南海トラフ沿いには、紀伊半島・潮岬の東側に東南海地震、西側に南海地震の震源域がある。研究チームが海底の地形や地下構造を分析した結果、潮岬を挟んで東西2000キロ以上にわたり、海底が数百メートル以上も隆起し、プレート(岩板)境界から枝分かれした巨大断層があることが分かった。1944年の東南海地震では、

東南海・南海の震源域で発見



巨大断層

この断層の一部が動き、津波の発生源となったことが判明している。

東京大の朴進午准教授(海洋地質学)は「海底が大きく隆起しているのは、この断層が連動型地震で繰り返し活動したためとみられる。連動型地震では津波の発生源となる可能性があるが、この断層を取り入れた津波発生モデルの再構築が必要だ」としている。

立川断層帯重点調査へ

地震研究本部予測精度向上狙う

政府の地震調査研究推進

本部は27日、マグニチュード7・4の地震が想定され

ている立川断層帯(東京都、埼玉(県)の重点調査を来

年度から始めることを決めた。震度6弱以上の揺れ

に見舞われる推定人口が1300万人と多いため、

3年程度かけて断層の形状や活動履歴を詳細に調べ、

予測の精度向上につなげる。

同本部によると、立川断層帯での想定地震の発生確率は、今後30年以内で最大2%と評価しているが、過去の活動を直接示す十分な資料がなく信頼度は低いと

している。一方、東日本大震災による地殻変動の影響で、発生確率は高まっている

可能性があるとしてい

る。